

## 日本台湾学会第3回関西部会研究大会

日本台湾学会会員各位：

時下ますますご清祥の段、お喜び申し上げます。さて、関西部会の第3回研究大会は、下記の日程で開催されます。会員の皆様はふるってご参加くださるよう、お願い申し上げます。

やまだあつし（名古屋市立大学・学会理事）

日時：2005年11月19日（土）

会場：名古屋市立大学・山の畑キャンパス（〒467-8501 名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑1）

人文社会学部棟 2階203教室（交通は右頁地図参照）

プログラム：

司会 黄英哲（愛知大学）

13時00分～13時50分 佐藤和美（関西学院大学・院生）報告

台湾民進党政権の外交－『人権外交』と『民主外交』の試みと意義－

コメンテータ 交渉中

小休憩

14時00分～14時50分 許時嘉（名古屋大学・院生）報告

「国語」の機能化と植民地台湾人

コメンテータ 下村作次郎（天理大学）

14時50分～15時40分 唐顥芸（神戸大学・院生）報告

楊雲萍の「山河」について

コメンテータ 澤井律之（京都光華女子大学）

休憩

16時00分～16時50分 やまだあつし（名古屋市立大学）報告

佐久間総督時代の「理蕃」官僚について

コメンテータ 河原林直人（龍谷大学）

16時50分～17時40分 山本和行（京都大学大学院生）報告

日本統治直後台湾の教育事業と教育官僚—国家教育社との関係を中心に—

コメンテータ 松田吉郎（兵庫教育大学）

終了後、近所の居酒屋で懇親会を予定しております（会費は3000円～4000円の予定）。こちらもふるってご参加ください。

参加費：無料（懇親会を除く）

問い合わせ先：

電話 052-872-5830（または052-872-5809） FAX 052-872-1531

名古屋市立大学 人文社会学部 やまだあつし

名古屋市立大学人文社会学部への交通

名古屋駅から野並行に乗り→桜山駅下車（乗車時間：約16分）

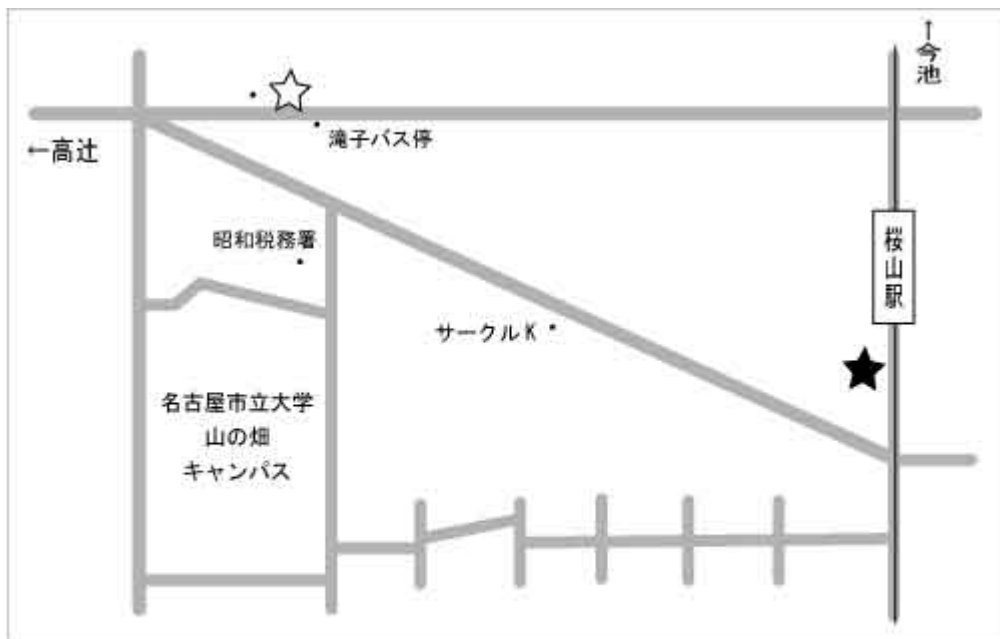
地下鉄桜通線 5番出口より西へ徒歩約15分

市バス  
金山バスターミナル7・8番のりばから、金山11・12・14・16系統に乗り、  
→「滝子」バス停下車（乗車時間：約15分）バス停より南へ徒歩約3分

【地下鉄路線図】



桜山駅からの詳細図 (右上の駅から、左下の人文社会学部まで住宅地の中を抜けて徒歩15分)



- ☆ 市バス金山発⑪⑫⑭⑯系統 滝子下車徒歩3分
- ★ 地下鉄桜通線 桜山駅5番出口徒歩10分

佐藤和美 報告

台湾民進党政権の外交－『人権外交』と『民主外交』の試みと意義－

2000年に始まる民進党政権の外交政策は、李登輝時代の「実務外交」を継続するその一方で、「人権外交」、「民主外交」という二つの新機軸を取り入れている。その結果、総督府における「人権諮詢小組」の発足、「台湾民主基金会」の設立、「民主太平洋連盟」の発足などが実現された。

人権・民主主義という概念を外交に用いることには、効果や手段としての適応性などに制約があるにもかかわらず、以下のような意義に注目できる。第一に、党外勢力としての歴史を持つ民進党が、人権擁護・民主主義の概念を国外に向けて発することは、極めてアピール性が高い外交手段となり得ること。第二に、人権擁護や民主主義は、アメリカが信奉する政治理念であり、台湾が、自らの価値観をアメリカと一致させることにより、米台の友好関係の一層の強化を期待できること。第三に、台湾自らが人権問題を提起することで、台湾の国連加盟の正当性や自決権への訴えとなること。第四に、人権擁護・民主主義において模範的な国際パフォーマンスを示すことは、中国に対抗する一つのパワーとなること、などである。

許時嘉 報告

「国語」の機能化と植民地台湾人

1937年以後、皇民化政策によって公的領域から台湾語が消失し、台湾語の公的機能が停止した。国語（日本語）と母語（台湾語）の二重生活において、「国語」を通して近代化の思想に接触する植民地台湾人の心の中に、言語に序列化されたコンプレックスが生まれていた。戦後にいたって、皇民化時期に生きた歴史経験は「親日でなければすなわち抗日とする」、「受容でなければすなわち抵抗とする」という二分化の見方で一括に片づけられている。そうした彼らの心理的な葛藤を無視し、その精神的系譜を一枚岩として「親日／抗日」による「善悪是非」ので解釈するのは恐らく脱植民地主義に従う政治暴力の再現である。二等国民として悩みつづけた結果、皇民化政策に従うことによってアイデンティティを模索する台湾人の姿にはどのような心境を抱いているのか。彼／彼女たちにとって、果たして国語とは何のものなのか。本発表では周金波の「ものさしの誕生」と陳火泉の「道」、王昶雄の「奔流」な

ど、皇民文学を通して国語常用政策の実施経緯とその実像を分析し、「国語」にまつわる被植民者の心境の変容を検討したい。

## 唐顥芸 報告

### 楊雲萍の「山河」について

2003年に『日本統治期台湾文学集成18・台湾詩集』が出版されたことによって、今まで入手が困難であった楊雲萍の詩集『山河』を容易に見ることができるようになった。

原文を読んでから、今までよく参考にしていた1982年出版の『乱都之恋』（遠景出版社）に収録されている楊雲萍の詩の中国語訳に、いくつかの間違ひがあることが判明した。さらに原文の数箇所、書かれている漢字には、日本語読みではなく?南語読みと思われる読み方で、ルビをつけられていることもわかった。

台湾文学における日本語文学は、現在の台湾に生きる人々の大半にとって、現代中国語に翻訳されなければ読めないものである。しかしながら、翻訳の過程において、テキストに含まれているメッセージが脱落していくことも否めない。誤訳の可能性をとりあえず除外していても、例えばいま述べたように、楊雲萍が日本語で書き上げた詩には?南語も使われていた。彼がそう書いたのはそれなりの意図があると考えられる。しかし、中国語訳にされたとき、彼の意図は訳文に反映されがたい。中国語訳の読者はそれを読み取ることができなかつたことさえも知らずにいた。

このような翻訳と原文の隙間から分析を入り、まだ詳しく研究されていない楊雲萍の詩集『山河』の紹介も兼ねて、この作品について論じてみたい。

## やまだあつし 報告

### 佐久間総督時期の「理蕃」官僚について

総督府の対原住民政策については、多くの言及がなされている。特に1930年の霧社事件についての記述が多く、佐久間総督（任1906～1915年）時期の武力「討伐」と、統治末期の皇民化と動員についての言及がそれに次ぐ。

しかしながら、「理蕃」にたずさわった官僚、特に政策を現場で指揮したようなノンキャリア上層についての研究は多くない。1930年代は、理蕃課技師の岩城亀彦らが注目されているが、佐久間総督時

期の「討伐」側官僚はあまり着目されていない。

台湾総督府の官僚全体についても、1920・30年代の経済官僚については、波形昭一「植民地台湾の官僚人事と経済官僚」が論じているが、それ以外の時期・分野の官僚については、殖産局に札幌農学校関があったなどが言われるだけで、詳しくわからない。よって、本報告で、佐久間総督時代の台湾総督府「理蕃」官僚について、彼らの経歴と役割、そして彼らを昇進させた特別任用制度の解明を行う。

## 山本和行 報告

日本統治直後台湾の教育事業と教育官僚—国家教育社との関係を中心に—

本報告は、日本統治直後の台湾における教育事業に関わっていた教育官僚に注目し、その人的な関係について考察する。

本報告の対象時期は1895年の日本による台湾領有から1898年の公学校設置までを想定している。先行研究では、当該期の教育事業について、台湾総督府民政局学務部の初代部長であった伊沢修二の教育方針と教育事業との関係について検討してきた。しかし、こうした視点からは、当該期の教育事業の展開を、伊沢が示した教育方針の実現から挫折の過程としてしか把握せざるを得ず、台湾統治以前における「内地」の教育事業をめぐる教育方針との関係、あるいは公学校の実現との関係といった、時間的あるいは空間的な相関関係を意識して当該期の教育事業について把握することは困難であるといえる。

報告者は、これまでの研究を踏まえつつ、伊沢の周囲の人々と教育事業との関わりを視野に入れ、当該期の教育事業の展開を捉える必要があると考える。そこで本報告では、当時の学務部における教育官僚の構成について、「内地」において1890年に発足し、伊沢が社長を務めた教育団体である国家教育社との人的な関係に着目し、当時の学務部における人的な特徴を明らかにする。そのことを通して、当該期の教育事業を支えた教育方針について再検討し、時間的・空間的な相関関係から当該期の教育事業が持つ意味を明らかにすることを目指す。